

2021年10月20日

報道機関 各位

国指定難病「多発性筋炎/皮膚筋炎」合併 間質性肺疾患に対する 世界初の分子標的治療薬の研究

～令和3年度日本医療研究開発機構（AMED）の難治性疾患実用化研究事業に採択～

2021年4月、長崎大学大学院医歯薬学総合研究科長 川上純（あつし）教授（リウマチ・膠原病内科学分野）を研究開発代表者とする研究が、日本医療研究開発機構（AMED）の難治性疾患実用化研究事業に採択され、スタートしました。

厚生労働省が難病に指定している病気の一つに「多発性筋炎/皮膚筋炎」があります。この病気は、免疫を担うはずの細胞が自らの身体の筋肉や皮膚を攻撃、破壊することで筋肉の痛みや筋力の低下、皮膚の炎症が生じる病気です。現在の治療法により、筋肉や皮膚の症状はかなりコントロール出来るようになりましたが、「多発性筋炎/皮膚筋炎」の治療で最も困っているのは、合併する「間質性肺疾患」です。「間質性肺疾患」は約半数の患者さんに合併し、「多発性筋炎/皮膚筋炎」で亡くなる患者さんの約半数は「間質性肺疾患」が原因です。今回、AMEDに採択された研究は、この多発性筋炎/皮膚筋炎に伴う間質性肺疾患に有効な薬剤の開発です。

多発性筋炎/皮膚筋炎に伴う間質性肺疾患を発症すると、肺に炎症が起こり、その後、肺は病気の進行とともに硬くなって（線維化）いきます。これを肺の炎症性線維化と言いますが、炎症と線維化の両方を制御できる薬剤の研究開発が、この研究における課題となります。現在、この炎症や線維化を引き起こす物質として活性化 IL-18 と呼ばれるサイトカイン（細胞間の情報伝達を担うタンパク質）が重要であることが分かってきており、川上純教授は島根大学医学部病態生化学の浦野健教授と共同で、この活性化 IL-18 を標的とした抗体製剤の開発研究に挑んでいます。

既に研究グループでは、マウス、ヒト双方の活性化 IL-18 を標的とした極めて高い結合親和性と機能阻害性を有する抗活性化 IL-18 抗体を創り出しており、今後その薬効について、マウスでの確認、ヒトへの応用へと研究開発を進めていく予定です。

この研究による製剤が可能になれば、「多発性筋炎/皮膚筋炎」に合併する「間質性肺疾患」において、世界初の分子標的治療薬となります。研究開発代表者の川上純教授は「この薬剤を用いて間質性肺疾患で苦しむ多発性筋炎/皮膚筋炎の患者さんを救いたい」と、この研究にかける意気込みを語っています。

【このリリースに関するお問い合わせ先】

長崎大学

医師薬学総合研究科 先進予防医学共同専攻 リウマチ・膠原病内科学分野 教授 川上 純

TEL : 095-819-7260 FAX : 095-849-7270

E-MAIL : atsushik@nagasaki-u.ac.jp